

宮崎市立生目中学校の学力向上への取組

1 学校の概要

国道 10 号線に隣接し、宮崎西インターチェンジ等の交通の要所が校区内にある本校は、生目の杜運動公園にプロ野球キャンプを迎えるなど、とてにぎやかな場所に位置している。反面、周囲を田園に囲まれ、生目古墳群を中心とした古墳公園も建設中であり、まさに「宮崎市環境方針」の「基本理念」にある、「自然の恵みと都市機能の集積がほどよく調和した田園都市」に学校が立地していると言える。

保護者の教育への関心は高く、参観日の出席率は 70 パーセントを超え、参観授業の際には保護者に授業評価をしていただいている。自治会長、民生児童委員の参加のもと全地区で実施している地区懇談会は、学校の考えを理解していただく良い機会になっている。二学期制の特長を生かし、全家庭を対象に、家庭訪問、三者面談も実施している。平成 14、15 年度には、宮崎市教育委員会から「学社融合生涯学習実践地域」の指定を受け、生目地区学社融合連絡協議会の方々とも連携を深めた。また、生目地区青少年育成協議会をはじめとする地域の方々も協力的で、家庭、地域、学校で生徒を見守ることができていると考えられる。さらに、今年度は生涯学習部を設置し、関係機関と年 1 回以上は話し合いを持ち地域との連携強化を図っている。

このような本校も、数年前にいわゆる「荒れ」を経験した。当時、立て直しの中心に据えられたのが、学力向上に裏打ちされた進路保証である。先般の台風 14 号で被災し、自宅以外からの通学を余儀なくされている 3 年生が「早く落ち着いた環境で勉強をしたい。」と語ってくれた。学校が荒れた状態から立ち直るまでを「第 1 ステージ」とするならば、現在の生目中学校は「第 2 ステージ」である。1 日も早い台風被害からの復興を願いながら「がんばろう生目」を合言葉に、夢チャレンジャー達の集う杜・生目中学校は学力向上を推進している。

2 児童生徒の実態

本校には、1 学年 4 クラス、2 学年 4 クラス、3 学年 4 クラス、特殊学級 1 クラスの計 13 クラスが設置されている。基本的な生活習慣の確立している生徒が多く、朝の遅刻はほとんどない。教師の指導にも素直に応じ、礼法も心得ている。部活動への加入率も 8 割を超え、文武両道を目指して活動している。

学習面では、授業の 1 分前着席、黙想ができており落ち着いた雰囲気勉強することができている。宅習を忘れてくる生徒もほとんどいない。現在、宅習の内容を充実させるべく指導を進めているところである。

2 年生を対象に 5 月に行われた学力調査では、全教科において「学習到達度調査」の校内の平均到達度が、県の平均到達度を上回っていた。「学習意識調査」でも「学びの基礎力」、「生きる力」共に本校の数値が県の数値を上回っていた。

しかし、「学習到達度調査」を設問別に細かく見てみると、国語科の「話し合いの内容の聞き取り」、「漢字の読み」、「文脈に即した内容の理解と記述」、「主題に対する考えの記述」、数学科の「文字式における係数」、理科の「物体にはたらく力」、「植物の分類」、「葉と蒸散の関係」、「気体の発生」、社会科の「地域の変化の考察」の数値が県の平均を下回っていた。

また、「学習意識調査」の場合「調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる」、「調べたことをコンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる」、「学習内容が理解できなかつたり、テストで間違えたりした原因について考える」という設問に、肯定的な答えをした生徒の割合や、「1ヶ月に読む本の冊数」が県の平均を下回ったことが気になる。

3 学力向上へ向けた経営方針

学校経営案の中に、「学力向上を目指す教育を推進する。」という標題で以下の3つが掲げられている。

- 確かな学力を身に付けさせ、進路保証の指導を実践する。
- 分かる授業と学び直しが保証される指導を実践する。
- 二学期制を生かした学習成績等連絡表「夢チャレンジャーへの道」の活用を促進する。

また、本校教育目標の具現化を図り、教育的課題を解決するため、生徒一人一人へのかかわりを強めるための努力事項として、以下の9つが掲げられ実践されている。

- 授業の完全実施（週時間割の作成）
- 自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力の育成
- 基礎的・基本的事項の精選と指導の徹底
- 学習能力の的確な把握と個別指導の充実、宅習の推進
- 教育機器、教具、資料の活用と学習指導法の改善
- 自主的、自発的な学習態度の確立
- 全教育活動を通じての進路指導の充実
- 進路指導の計画的実施と内容充実
- 小学校、高等学校との連携

4 教育課程内の取組

「学習到達度調査」から、国語学習のみならず様々な場面で基礎となる「漢字の読み」、「話し合いの内容の聞き取り」が県の平均を下回っていたことが分かった。

まず、国語科の先生方と連携をし、授業中に行う漢字小テストの間違いを徹底してやり直しさせることで、定着を図った。

始めのうちは合格できずに何度も再テストに来る生徒が多かったのだが、教師が妥協をせず、徹底してやり直しをさせることが生徒に伝わると、事前にしっかりと予習をしてくる生徒が増えた。自分たちで予想問題を作り、友人と問題を出し合う姿も見られ、自主的に学習する力を身に付けることにも役立てることができた。

すると、ほぼ全員の生徒が期末テストの漢字の部分で8割以上正解することができた。生徒にも達成感と、自信を持たせることができたように思う。

次に、本校の校内研究の一環として月1回行う道徳の研究授業の参観の視点に「話す場面、聞く場面」を評価する項目を設け、生徒の活動の様子を参観する教師で評価した。授業をする教師も、意識して「話す場面、聞く場面」を取り入れた授業を行った。

生徒の聞く態度を指導していくと、発表する生徒は自分の発言を聞いてくれる友人の真剣な姿勢に負けないように、思いを込めて自分の考えを述べてくれる。

9月の研究授業の「話す場面、聞く場面」の項目に対する参観者の評価は、80パーセント以上が、満足できるというものであった。

5 教育課程外の取組

生徒の実態を考え、全ての教科において基礎・基本となる「読む力」を向上させるために、生徒の読書量を増やすことが必要だと考えた。

本校では、年に3回教育相談期間を設け、全校で取り組んでいる。帰りの会終了後、学級担任が一人一人の生徒と面談をするわけだが、待機している生徒に学級文庫から好きな本を選ばせ、読書をさせることにした。「読書記録カード」にその日読んだ本、ページ、感想を一言書かせている。

10日以上に渡る教育相談期間に読書を行わせることは、生徒に読書への意識を啓発できたように感じる。読んでいる本の続きが気になり、休み時間にも読書をする生徒が増え、静かに過ごすことができるようになったという状況も出てきた。給食時間の生徒の会話の中にも、読んだ本の感想が話題に上ることもあった。長編の小説を2晩で読破したことや、今後読もうとしている小説、映画になり話題に上っている小説のことをうれしそうに学級担任に話している様子も見られた。自分が読んだ小説を教師が読んでいないときなど、得意になって話してくれた。学校の図書館、市立図書館、県立図書館にも興味が向き、休日の日記には友人と図書館で過ごしたことが書かれていたこともあった。

また、生徒が学級担任に毎日提出する「生活の記録」に毎日の読書量を記入させるようにし、教師が評価をするようにした。すると、生徒が競うように読書をするようになりますます読書量が増えた。

本校で、月に1回行っている「学校生活アンケート」で読書量を調査したところ、5月に実施された「学習意識調査」で3冊程度だった1ヶ月の読書量が、9月には5冊近くにまで増えていた。

6 保護者・家庭、地域との連携

本校では、1年生から3年生までセミナー学習を取り入れている。セミナー学習の実施方法やその意義は、家庭訪問、参観日の学級懇談、三者面談や通信で保護者に説明をし、家庭での協力を依頼した。また、地区懇談会や学校評議委員会でも学校の取組として地域の方に紹介している。

セミナー学習は、解説シートを見ながら家庭で自学自習できるものである。通年8講座あり、1講座が各教科4回に分かれている。生徒は帰りの会で、解説シートと問題シートを渡され、家庭で予習をしてくる。それを翌日の朝自習で解答シートを見ながら自己採点を行い、宅習でやり直し、学級担任に提出する。

そして、1講座終わるごとにセミナーテストを実施するのだが、講座ごとに難易度も上がるため、常に平均350点以上取ることを目標とした。徹底した教師による点検と、確実にファイルしてプリントを保存し予習復習に役立ててきた結果、今年度最初のテストでは平均359.0点だったものが、2回目には平均378.6点に上がった。

このセミナーテスト等の結果は、本校独自の学習成績等連絡表「夢チャレンジャーへの道」を通して保護者に伝える。この「夢チャレンジャーへの道」には、成績の記録やグラフ欄の他に、「自分の良さのあゆみ」という題で、部活動やボランティア活動における活躍を記録する欄や、体力テストの結果を貼り付ける欄などもある。さらには、保護者との共同作業で記入する進学希望や将来の希望職業の欄もあり、成績の反省だけに留まらず保護者の願いや励ましも書かれ、生徒の指針となっている。

7 成果と課題（次年度の取組を含む）

(1) 成果

- ① 学力調査を基に現状を把握し、対策を練り実践したので生徒に具体的な指導ができた。
- ② 小テストと定期テストを連動させたため、生徒に具体的な目標を持たせ学習させることができた。
- ③ 教育課程外での読書活動を通して、読書に対する啓発をすることができた。
- ④ 学習成績等連絡表や学級通信、三者面談などを通して、保護者・家庭との連携を密にすることができた。

(2) 課題

- ① 学力調査を再分析し、新たな課題とさらに効果的な対策を検討し、達成状況を判断するための評価項目を研究する。
- ② 国語科以外の教科について教育課程内の取組を研究する。
- ③ 自分の考えをまとめて発表させたり、原因を考えさせたりするための効果的な指導方法を研究する。
- ④ 学力向上に関して地域とのさらなる連携の在り方を研究する。